

研究課程 1988-2001

大久保千代次

研究課程は、昭和55年、本院教育体制の改革における主要な一つの柱として創設されたもので、大学院博士課程に相当する。標準修業年限は3年で、入学資格は、本院専門課程修業者、若しくは、医師、歯科医師及び大学院修士課程の修了者で昭和55年以前の本院専攻課程の修業者、であることが要求される。また、これらと同等以上の学力あり、と院長が認めた場合に入学が許される。

研究課程の修了要件としては3年以上在学し、研究論文を作成のうえ提出して、その審査及び試験に合格しなければならない。本過程の定員は5名である。昭和63年から平成13年度までに研究課程へ入学した者は、昭和63年度に5名、平成元年度は3名、平成2年度は9名、平成3年度は8名、平成4年度は8名、平成5年度は7名、平成6年度は6名、平成7年度は4名、平成8年度は2名、平成9年度は5名、平成10年度は6名、平成11年度は3名、平成12年度は1名、平成13年度は無しで合計64名であった。なお、平成11年度以降は、国内在住の者を対象としたそれまでの入学枠は中止され、在外外国人のみ対象とした外国人枠が適用されたため、入学者数は激減した。しかし、平成14年度以降には国内在住の日本人や外国人への門戸を再開するので、再び増加に転じるものと期待される。

昭和63年から平成12年度までに研究課程を終了した者は、昭和63年度に4名、平成元年度は5名、平成2年度は3名、平成3年度、平成4年度は各2名、平成5年度は5名、平成6年度は6名、平成7年度は5名、平成8年度は6名、平成9年度は2名、平成10年度は4名、平成11年度は2名、平成12年度は4名で、合計64名であった。

課程修了には3年が求められるが、特に優れた研究業績をあげた場合、在学期間は1年以上あればよい、とされており、韓国から留学生が昭和61年度はじめて1年で終了したのに引き続き、同じ韓国からの留学生が平成11年度に1年で終了している。2年間で終了した者は、昭和63年度、平成元年、平成2年度に各1名、平成5年度に2名、平成6年度、平成8年度、平成10年度、平成11年度、平成12年度に各1名であった。

一方、4年以上在学した者も多く、入学年度が昭和63年、平成元年に各2名、平成2年、平成3年に各1名、平成5年度、平成6年度、平成7年度に各2名、平成8年度、平成9年度、平成10年度、平成12年度に各1名の学生が、長期在学した。

昭和63年から平成13年度までの入学者64名の専攻内訳をみると、医学が28名と最も多く、他には、歯学、看護学、理工学、保健学、栄養学、社会学など様々な分野の専攻者が含まれる。職種別に医師が28名、歯科医師が3名、看護婦が2名、助産婦、保健婦が各3名、管理栄養士が2名、薬剤師が1名、臨床検査技師が2名、その他が20名である。

国外からの入学者は、平成2年度に中国およびエジプトから各1名、平成3年度に中国から1名、平成4年度に中国から1名、韓国から2名、平成5年度に中国から2名、平成6年度に中国から2名、ブラジルから1名、平成7年に中国から2名、平成8年、平成9年度に中国から各1名、平成10年度に中国、ネパール、バングラディシュから各1名、平成11年度に中国、韓国、タイから各1名、平成12年度にネパールから1名であった。研究課程就業者の研究論文の一覧を表に示した。

研究課程のかかえる制度上の最大の問題点として、発足に際し見送られた、学位制の問題がある。学位制は本課程の充実、発展を図るために基本的要件と思われる。現在、課程修業者には、“Doctor of Public Health”の称号があたえられるが、国内では一般には博士号と同等に扱われてはいない。この問題の早急な解決が望めない限り、優れた研究者を続々世に送り出し、実のあるところを示すよう努力する以外にはない。ただ、大学評価・学位授与機構による学位認定という選択があるが、その道のりは遠い。なお、国外では通常の学位と等しく扱われる場合が多いという実績があり、この点はこの問題の今後の解決を考えるうえで大いに力づけられる。

研究課程修業者の研究論文一覧表(1)

修業年度	氏 名	研 究 論 文 題 目
昭和 63	石 塚 正 敏	減塩指導用試験紙をセルフチェック用ツールとして活用した健康教育の効果
	佐 藤 龍三郎	中華人民共和国における出生力低下の要因と過程に関する研究
	秋 澤 より子	公衆衛生の現場で使用可能な食事調査・診断表の作成
	胡 伊 拉	地域保健計画における課題とあり方に関する基礎研究
平成 元	石 引 弘 美	衣生活と健康－高校家庭科における健康教育の試み－
	加 藤 春 樹	精神障害者の生活地域におけるリハビリテーション過程の研究 －共同作業所の現実的役割－
	岩 永 俊 博	高齢者の主観的健康に関連する要因の分析
	間 宮 ゆかる	幼児の乳臼歯う蝕重症度に関連する母親の行動とその背後にある母親のライフスタイルについて
	安 川 隆 子	我が国における妊産婦死亡率の動向と影響要因についての考察
2	西 村 和 之	水の衛生学的評価と膜処理技術に関する基礎的研究
	葛 田 衣 重	遷延性意識障害による長期入院患者の外出決定要因に関する研究
	金 子 仁 子	胃ガン検診における効果的な保健婦活動方法に関する研究
3	本 田 靖	疾病誤分類の「疾病－暴露関連尺度」に与える影響に関する研究
	矢 島 理恵子	う蝕と歯列不調和に関する要因分析とその相互の影響について
4	徳 永 瑞 子	中央アフリカ共和国の出生体重に関する研究
	土 屋 八千代	日本の産業労働者のLife eventに関する研究
5	Abou Shousha Yahya	Characteristics of chlorine tablet solubility and their disinfection efficiency of Jonkasou effluents
	牛久保 美津子	在宅看護従事者に対する現任教育のあり方に関する研究
	山 崎 聖 美	顆粒球中性プロシアーゼ－カテプシンG－の生理的意義
	趙 南 勲	Demographic transition effects on the fertility decline in the Republic of Korea
	洪 文 植	Analysis of induced abortion status and its demographic effects in Korea
6	潤 上 博 司	わが国の出生率低下について出生コホートによる分析
	張 黎 明	中国東北地域における栄養と食生活の研究
	神 田 清 子	若年者と高齢者の入浴の温熱効果と睡眠に及ぼす影響
	汝 宣 紅	地域特性を考慮した廃棄物発生量の推計に関する研究
	尾 島 俊 之	全国の市町村における健康づくり事業の実態及びマンパワーに関する研究
	加 藤 昌 弘	肥満・高血圧、高脂血症と糖代謝異常に対する運動指導効果の継続とその関連要因

研究課程修業者の研究論文一覧表(2)

修業年度	氏 名	研 究 論 文 題 目
7	西 村 いづみ	地域リハビリテーションについての考察 －八王子保健所モデル事業10年間の実績から－
	綿 引 信 義	死亡率の男女格差に関する研究
	劉 瑜	床吹き出し空調方式における粗大浮遊粒子状物質の挙動に関する研究
	和 田 耕太郎	地区組織活動への参加態度に関連する要因の検討
	高 建 群	中国における少数民族の死亡率に関する研究
平成 8	森 口 育 子	発展途上国の専門職プライマリ・ヘルス・ケア・ワーカーが直面している問題と質的向上に関する研究－インドネシアの地域助産婦を事例として－
	孫 歩 祥	食品添加物と食品中天然物質との複合作用及びその毒性評価について
	菅 原 繁	藻類の凝阻害に関する研究
	松 井 康 弘	廃棄物資源化施策の計画・評価に関する研究
	寧	バイオテクノロジーの手法を用いた抗原・抗体の製作とウイルス研究への応用
	王 徳 文	中国福州市における一人っ子の発育、発達についての研究
9	井 後 純 子	乳臼歯う蝕と永久歯う蝕との関連性について
	陳	老人保健施設の有効性に関する研究
10	一 宮 頼 子	デンタルプレスケールシステムにおける口腔内状況評価の検討 －地域歯科保健への試み－
	徐 慎 之	電磁場特に商用周波数(50 60Hz)を含む超低周波数電磁場の生体影響に関する研究 －微小循環動態への影響を中心として－
	工 藤 芳 子	発展途上国での周産期管理における臨床検査の役割特にカンボジア都市部3次医療施設での尿蛋白マスクリーニングの導入と妊娠中毒症について
	須 藤 紀 子	日本の労働者の労働習慣と生活習慣及び自覚症状に関する研究
11	石 井 敏 弘	軽症患者による救急車利用を促す要因に関する研究
	金 龍 文	韓国老人の健康状態に影響を及ぼす関連要因の分析に関する研究
12	田 中 あゆ子	上腕周囲長による発育／栄養状態評価の妥当性－タンザニアにおける縦断研究－
	康 文 江	中国黒龍江省における人口動態統計の現状と出生体重統計の活用に関する研究
	佐 藤 准 子	発展途上国の結核対策における喀痰塗抹検査の質に関する研究 －フィリピン国セブ州を例として－
	梅 家 模	中国江西省における循環器疾患とライフスタイルに関するコホート研究

平成13年度には、4名が研究論文を提出したが、審査中のため掲載を見送った。